

岡本山横穴墓

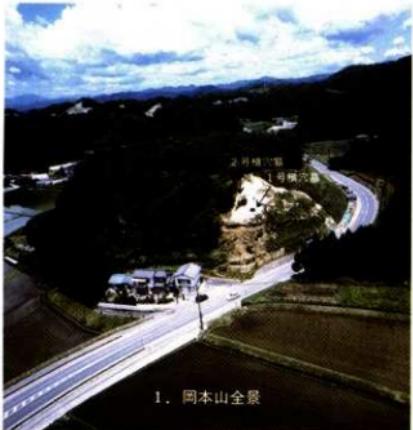
主要地方道多治見・白川線県単現道構造改築工事に伴う

緊急発掘調査報告書

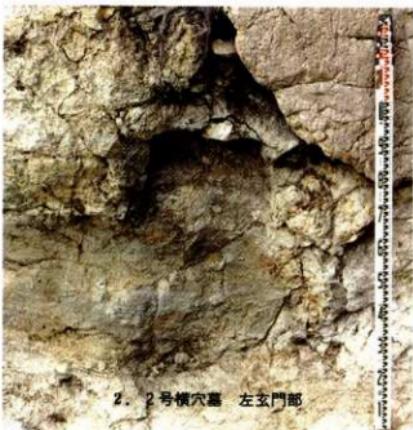
1995

岐 阜 県

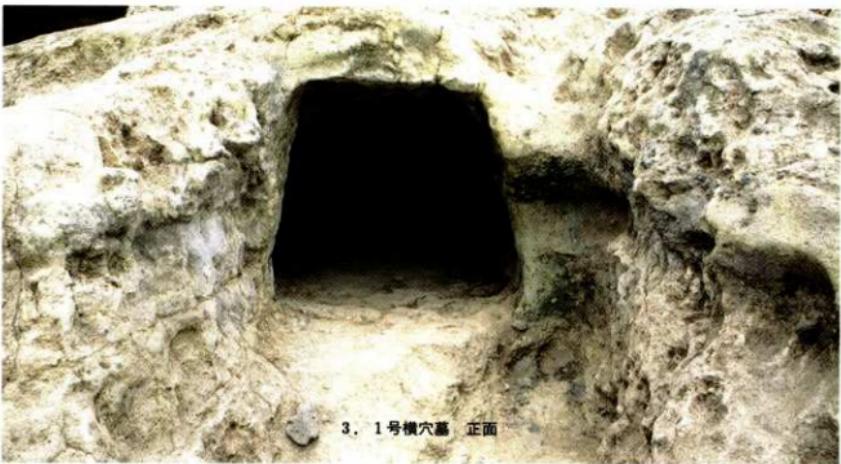
財団法人 岐阜県文化財保護センター



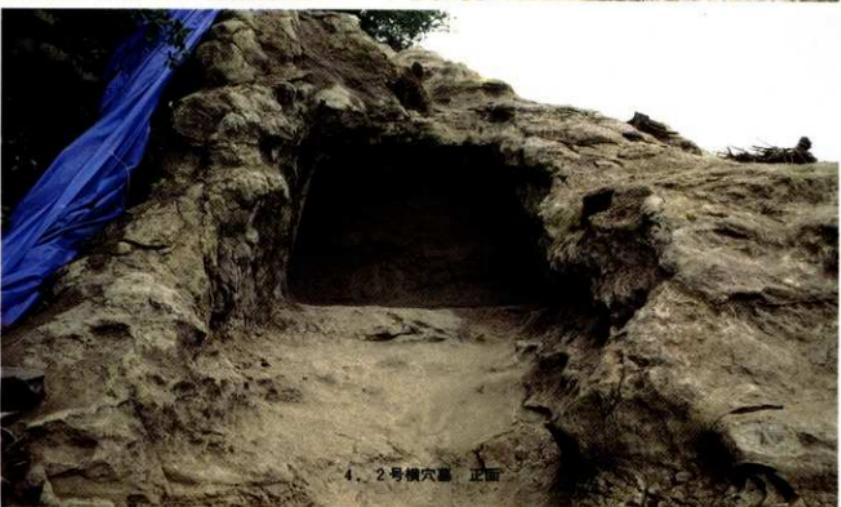
1. 岡本山全景



2. 2号横穴墓 左玄門部



3. 1号横穴墓 正面



4. 2号横穴墓 正面

序

現代生活にとけ込んでいる伝統と近代感覚を有する美濃焼は、古くから志野焼・織部焼などの名称で知られています。その名品の数々を生み出した可児市。この可児の土地は、一万年以上も昔から現代へと連綿と続く人々の暮らしを育み、豊かな文化の華を咲かせてきました。その足跡は文化財として市内各所に残されています。

さて、このたび、県単現道構造改築工事（多治見～白川線）に伴い、埋蔵文化財の記録保存をはかるため岡本山横穴墓の発掘調査を実施しました。

可児川と久々利川に挟まれた丘陵上には古墳が群在していることは周知の通りです。この群集墳の中に横穴墓群が含まれ 100基を優に超える横穴墓が久々利川水系一帯に造営されています。今回の発掘調査は「岡本山横穴墓群」としてその存在が確認されていた中の2基について実施しました。横穴墓の時期や性格を決定づける遺物の出土を見ることはできませんでしたが、築造過程で使用された工具痕や形状などを確認し、記録保存することができました。

今回の発掘調査の成果が、埋蔵文化に対する認識を深めるとともに、古墳時代の研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成にあたってご協力いただきました関係諸機関並びに地元の関係各位の皆様に深く感謝申し上げます。

平成7年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター

理事長 吉 田 豊

例　　言

1. 本書は岐阜県可児市久々利柿下入会岡本5-1に所在する岡本山1・2号横穴墓（G34K04866、G34K07563）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は主要地方道多治見・白川線県単現道構造改築工事に伴うもので、岐阜県土木部可茂土木事務所から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は平成6年度に実施し、大參義一愛知学院大学教授の指導のもとに市原輝明・各務光洋が担当した。
4. 本書に記載した実測図等のトレースは各務光洋が行った。
5. 本書の執筆は第1章、第2章を市原輝明が、第3章、第4章を各務光洋が担当した。尚、編集作業は市原・各務が行った。
6. 空中写真測量は国際航業株式会社に委託して行った。
7. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関からご助言・ご協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称・肩書き略）
中島勝国　長瀬治義　内堀信雄　橋詰佳治　可児市教育委員会
8. 発掘調査作業ならびに調査記録の整理等には次の方々の参加、協力を得た。
古賀次夫　須淵　巖　水野テツ子
9. 調査記録は財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

1. 方位は磁北である。
2. 本文中の右、左の呼称は奥壁に向かっての方向である。
3. 1号横穴墓の主軸の方向はN-1°59'-W、2号横穴墓の主軸はN-20°56'-Eを示す。
基準杭の座標値 BM1 (X : -65,808.704 Y : -5,716.120 H : 138.553)
BM2 (X : -65,808.031 Y : -5,727.076 H : 136.668)
4. 横穴実測図は縮尺1/50である。
5. 水系レベルは標高を示し、右又は左肩に記した。

目 次

序

例言・凡例

第1章 位置と自然的環境..... 1

第2章 調査の経過..... 2

 第1節 調査に至る経緯

 第2節 調査の経過と方法

第3章 遺構..... 8

 第1節 岡本山横穴墓の概観

 第2節 遺構

 (1) 1号横穴墓

 (2) 2号横穴墓

第4章 まとめ..... 17

参考文献

図 版

挿 図 目 次

第1図 久々利川水系の古墳分布図..... 3

第2図 調査区域全体図..... 5

第3図 1号横穴墓実測図..... 11

第4図 2号横穴墓実測図①..... 13

第5図 2号横穴墓実測図②..... 15

表 目 次

第1表 久々利岡本山横穴墓計測表..... 8

写真図版目次

巻頭図版

1. 岡本山全景
2. 2号横穴墓 左玄門部
3. 1号横穴墓 正面
4. 2号横穴墓 正面

図版

- 図版 1-1 調査前全景
図版 1-2 1号横穴墓調査前
図版 1-3 2号横穴墓調査前
図版 2-1 久々利川より岡本山をのぞむ
図版 2-2 調査区全景
図版 2-3 1号横穴墓正面
図版 2-4 1号横穴墓右側壁部
図版 2-5 1号横穴墓玄室左側壁部
図版 3-1 1号横穴墓奥壁部
図版 3-2 1号横穴墓右前方より
図版 3-3 1号横穴墓床面～左・右側壁部
図版 4-1 2号横穴墓玄室正面
図版 4-2 2号横穴墓右前方より
図版 4-3 2号横穴墓左前方より
図版 5-1 2号横穴墓玄室左。天井部～側壁・奥壁部
図版 5-2 2号横穴墓玄室右。天井部～側壁・奥壁部
図版 5-3 2号横穴墓床面～左・右側壁部
図版 6-1 2号横穴墓左玄門部
図版 6-2 2号横穴墓右玄門部
図版 7-1 2号横穴墓左天井部工具痕
図版 7-2 2号横穴墓右天井部工具痕
図版 8-1 岡本山 3号横穴墓現況
図版 8-2 岡本山 4号横穴墓現況
図版 8-3 岡本山 5号横穴墓現況
図版 9-1 岡本山 6号横穴墓現況
図版 9-2 岡本山 7号横穴墓現況
図版 9-3 岡本山 8号横穴墓現況

第1章 位置と自然的環境

可児市は岐阜県の東南部に位置し、東は可児郡御嵩町、南は多治見・土岐両市、北は木曽川を隔てて美濃加茂市、西は愛知県犬山市と接している。

可児市付近の地形は、北部の河岸段丘、中・南部の低丘陵、そして古生層により形成された東・西部の高所に大きく区分できる。木曽川が形成した北部河岸段丘は、第四紀更新世の堆積物（砂礫）で構成され、地形面は高位・中位・低位の三段を数えることができる。中央の低丘陵はカニサイやヒラマキウマなど哺乳動物の化石を産することで有名な第三紀中新世の中村層と平牧層である。平牧層は内陸性の湖底堆積物であり、凝灰岩質砂岩およびシルト岩の累層をなす。今回の調査対象区域はこの平牧層の露頭部分にあたる。南部の丘陵は中村層・平牧層の上に古木曾川（註1）の運搬による第三紀鮮新世の土岐砂礫層が堆積している。東・西部の高所は市域の東端に標高335mの鳴吹山が、西端には標高372mの浅間山が古生層により形成されている。この古生層は基盤岩（チャート、粘板岩、砂岩、頁岩）であり本地域の上台をなし、「秩父古生層」と呼称される。

巨視的に見ると、可児市周辺は中古生層が陥没してきた可児盆地（註2）の南部に属する。河川に目を移すと市の北側を東から西に可児川（松野湖源流）が流れ、ほぼ中央を東西に久々利川が貫流する。この久々利川は大森川・姫川を支流に持つ。可児川は市のほぼ中央付近で久々利川と合流して大河川木曽川に注ぐ。

本横穴墓は、可児川と久々利川に挟まれた可児丘陵の一支部に存在する。岡本山は現況でこそ単独丘陵に見えるが、東西に延びる一連の丘陵の西端にあたる。頂上付近の標高は148mで横穴墓8基は標高140m前後の南斜面に列するように穿たれる。横穴墓と麓の県道との標高差は約16mを測り、約500m南方には久々利川が流れる。横穴墓の開口部に立ち、南に視野をかまえると、眼下に久々利川が開析した低位段丘面（現在は、田畠等に多く使用されている）を望むことができる。

（註1）古木曾川：今の木曽川の前身である大河川。第三紀の終わり頃（約500万年前）、木曽川の山地から大量の砂・砾を運搬し、可児町一帯の湖を埋没させた。

（可児町『可児町史』通史編 原始1980）

（註2）可児盆地：「可児堆積盆地の生成当時の地質環境は、基盤岩類すなわち、秩父“古生層”および花崗岩類からなる相当浸食の進んだ山地が沈降して生じた内陸性の湖盆であったと思われる。」

（可児町教育委員会『平牧の地層と化石』1977）

第2章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

可児市は、名古屋市を中心とする都市圏へ車で50~60分の範囲に入り、いわゆる“名古屋のベッドタウン”としての機能を有することから、近年、宅地開発が急速に行われてきた地域である。また、平成7年4月から“花フェスタ'95”が開催されるため、その付近一帯も街路整備に関わる工事が行われている。

さて、本横穴墓が発掘調査の対象となった直接的契機は、可茂土木事務所による主要地方道（多治見~白川線）県単現道構造改築工事にある。総延長2,040mにわたり現道を3.5m拡幅し自転車歩行者道を設置することは、先述の“花フェスタ'95”的周辺整備事業の一環である。

県単現道構造改築工事の拡幅上にある「岡本山1・2号横穴墓」は、岐阜県遺跡地図（平成2年3月改訂）に記載されており周知の遺跡とされるところである。

この県道改築工事に關わり、平成6年1月に「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事」の取り扱いについて、可茂土木事務所は可児市教育委員会を通じて岐阜県教育委員会と協議を持った。その結果、現状保存をはかることが難しいため、発掘調査をして記録保存をするのが望ましいとの結論に至った。発掘調査は、財団法人岐阜県文化財保護センターが岐阜県教育委員会より委託を受け、平成6年5・6月に実施した。

第2節 調査の経過と方法

現地調査は平成6年5月9日から同6月13日まで延べ36日実施した。現地調査に先立って、本横穴墓調査作業中における排土落下防止のための柵を設けた。また、報告書作成に伴う作業は、現地調査終了後、平成7年2月、3月に実施した。

以下に現地調査の経過と方法を週ごとに略記する。

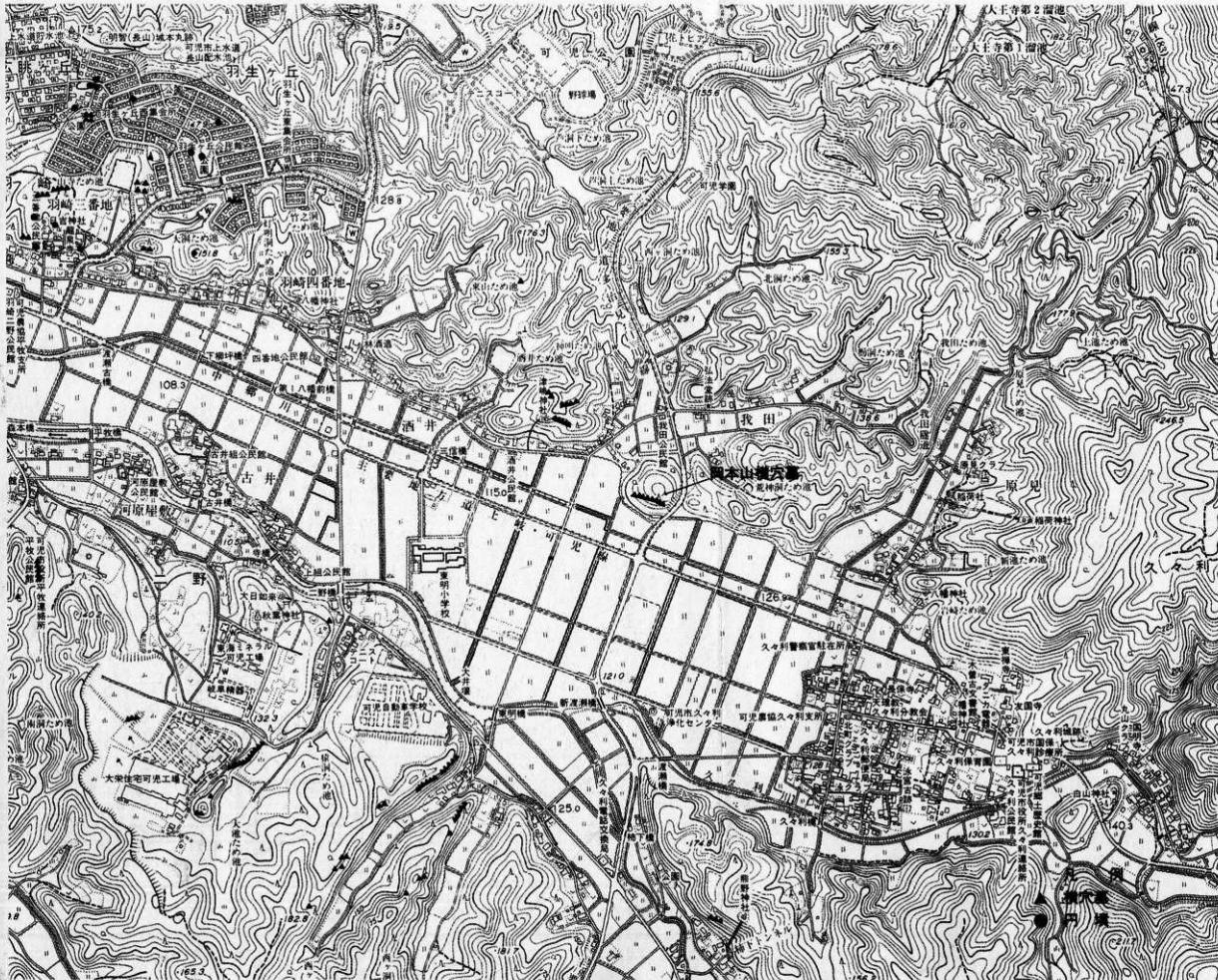
第1週（5.9~5.13）

横穴墓群の登り口に階段を設営した後に、1・2号横穴墓上位面の地山検出作業を行った。凝灰岩の割れ目に入り込んだ木根の除去に苦慮しながら作業を進めた。また、1・2号横穴墓上位面は急な斜面のため作業には命綱を着けるなど細心の注意をはらった。

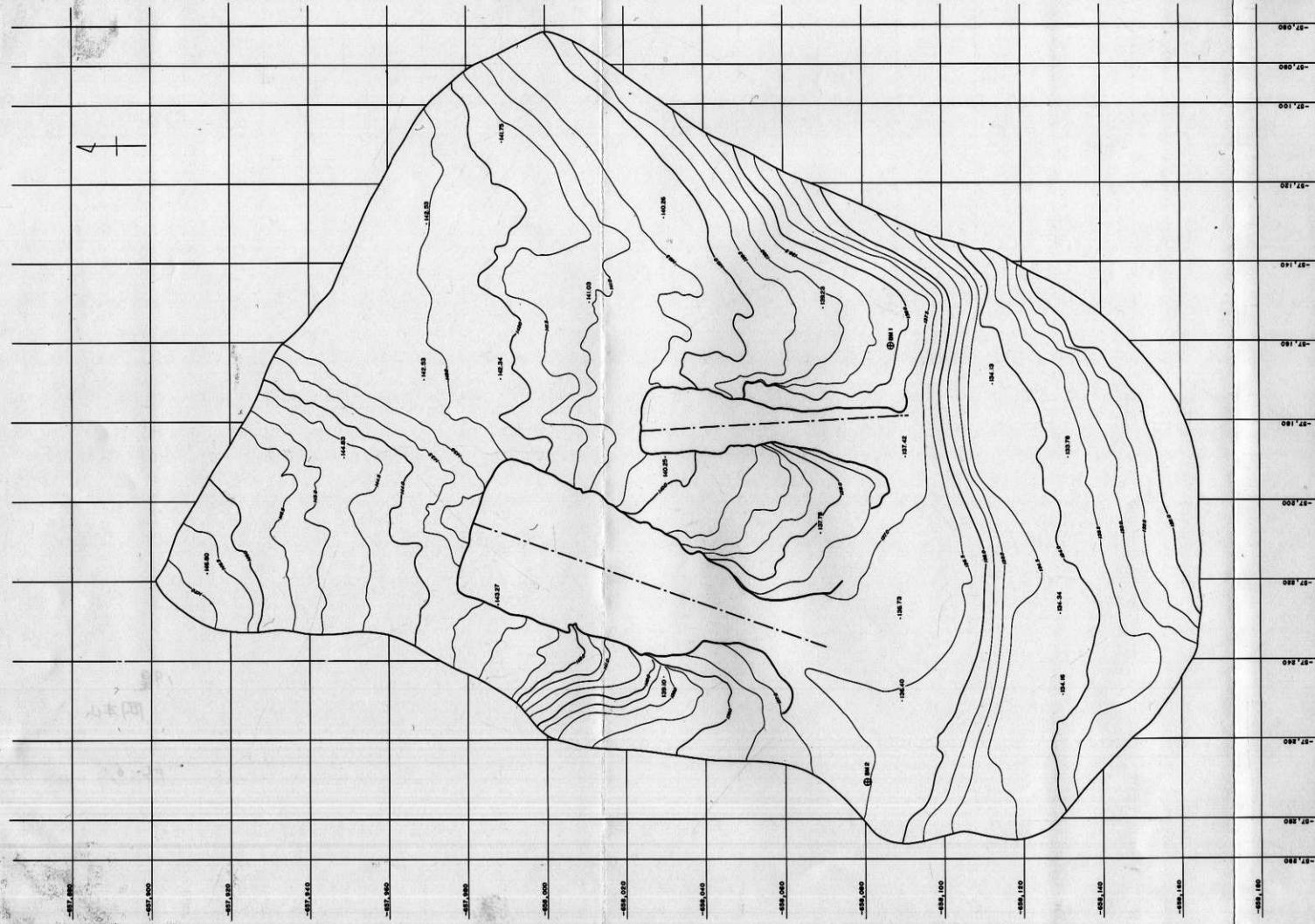
基準杭は1・2号横穴墓の東西に各1点ずつ設置した。その基準杭を基に1・2号横穴墓の主軸線を決定した。

第2週（5.16~5.20）

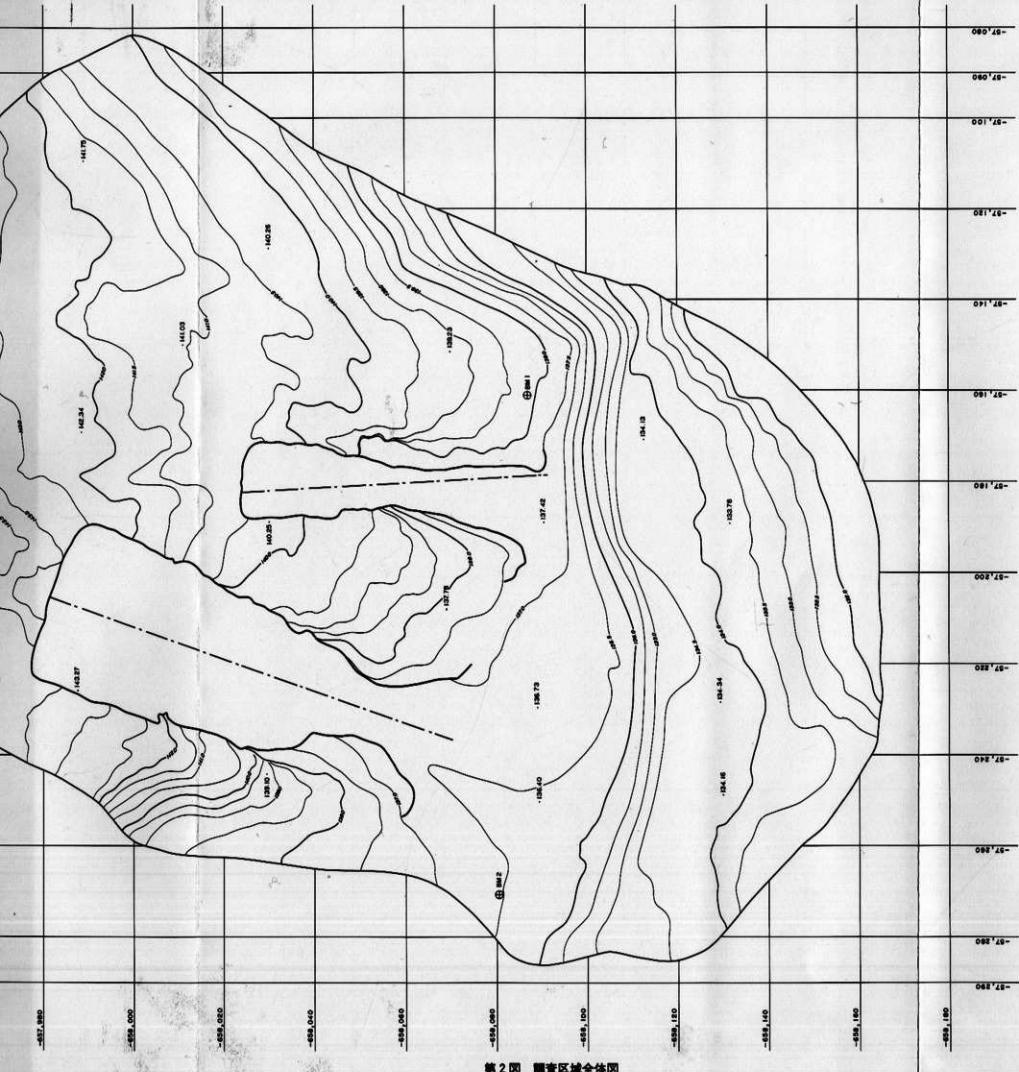
1・2号横穴墓玄室内部の埋土を除去し床面の検出作業を行った。この作業では出土遺物の有無を確認するために、床直上の埋土を篩にかけたが遺物は確認されなかった。また、1・2号横穴墓玄室から羨道部の床面の検出作業及び前部の埋土掘削作業も行った。



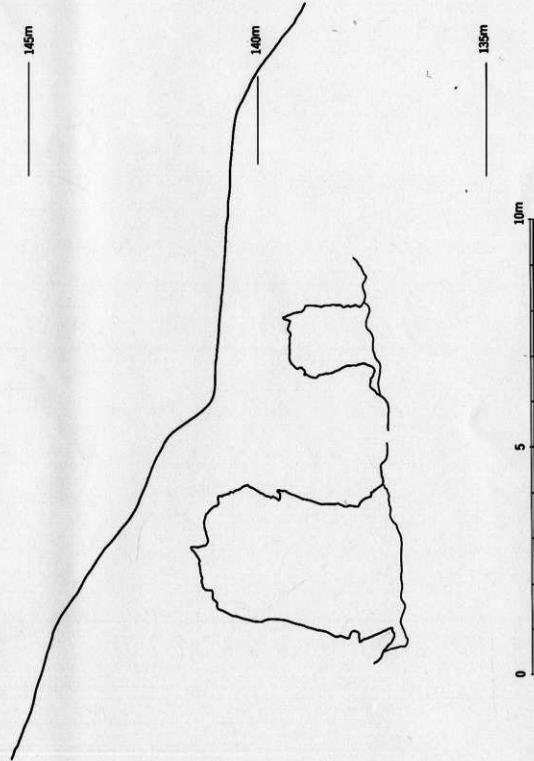
第1図 久々利川水系の古墳分布図 (1:10,000)



第2図 調査区域全体図



第2図 調査区域全体図



第3・4週（5.23～6.3）

1・2号横穴墓の実測作業と玄室内の工具痕の写真撮影、そして1・2号横穴墓の前庭部下段の残土除去作業を行った。

第5週（6.6～6.10）

1・2号横穴墓の西に一列に並ぶ3～8号横穴墓の略測図及び写真撮影を行った。また、先述の残土除去作業を終了した後、空撮のための清掃作業を行った。（尚、空撮は6月13日に実施した。）



1号横穴墓 調査風景



2号横穴墓 調査風景



大森皿屋敷横穴群

(昭和初期)

第3章 遺構

第1節 岡本山横穴墓の概観

久々利岡本山の南斜面に存在する横穴墓は8基である。今回調査を行った1号・2号の横穴墓はこの中で最も東方向に位置し、100基を超えるとされる久々利川水系の横穴墓においても東端のものになる。この岡本山の東側は調査前より県道多治見白川線が通り、景観としては単独の丘陵に見える。しかしこの地は山脚部において本来、荒神洞へと連続しており、完全な独立丘陵を形成するものではない。8基の立地状況は岡本山の尾根近くに造られ、各々は南方向から南西方向に開口する。玄室の床面レベルは5号と8号が標高140mを超えて比較的高い位置に造営されるほか138m～140mの中に入りほぼ高さを等しくする（第1表参照）。

高所に築造されたことや穿たれた露頭の形成層の影響からか、玄門部付近で自然の崩落がおこって保存状態は全般に良好とはいえない。また、久々利地区が圃場整備される前頃まで岡本山の南斜面下位に農業用の小道が通っていたことや、農作業に際して雨宿りの場として使われていたり、焚火を行ったりした跡が見られ封鎖石は確認されず埋葬時の状況を残すものは少なかった。

構造等について玄室の平面形に視点をおくと長方形を基本としたものが1～5・7・8号と椭円を基本としたものが6号に大きく2種に分かれる。しかし床面に小礫が敷かれていたものではなく、二野地区の鍋煎A-1号横穴墓のように、棺座や造り付けの棚はいずれも確認されず埋葬方法における背景に特異とするものは8基においては見られなかった。3号～8号は現状把握のみであり、遺物の残りについては不詳である。

第1表 久々利岡本山横穴墓 計測表

	1号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号
玄室開口部（玄門部）高さcm	125	195	210	135	140	140	150	130
幅cm (125)		320	270	170	140	180	155	155
奥行きcm	260	300	260	200	280	220	360	140
玄室最大幅cm	165	365	303	232	303	230	320	270
玄室床面レベルm	138.12	138.58	139.22	138.66	140.42	139.55	139.70	140.75

第2節 遺構

(1) 1号横穴墓（第3図、図版2・3）

当初から開口しており、周知の遺跡として古くから知られていたものである。久々利川により開析された平地からもその存在は確認できる。規模は非常に小さく、大人が腰を曲げ小さく屈んで入ることができる程度のものである。その規模ゆえに後世の掘り込みはないが、玄室内の壁面・天井部の風化が激しい。山頂部から流れ落ちる雨水がこの横穴墓の右側壁を打ち、大きく剥落している。また、羨道部から先の床面も削り取られ、凝灰質砂岩に内包される礫を剥き出しにしている。玄室外の保存状態は良好とはいえない。

遺物の出土については細心の注意を払い、玄室内清掃時に排出される土をふるいにかけたが須恵器の小破片一点すら確認できなかった。また、流失しない転落した遺物の可能性もあるとして羨道部に堆積する土についても同様の作業を行ったが皆無であった。

玄室の平面形は隅丸の長方形に近いが、右側線はゆるく円を描くかのようでありいびつである。左壁に平行して主軸ラインを決定すると、方位はN-1° 59'Wである。羨道部の右側壁が雨水によって抉られるため全体的に西方向へ反る。この形状を考慮し、なおかつ東側の壁の遺存を参考にすると主軸全長は6.50mを測る。玄室と羨道部の境は断面DラインとEラインの間に見られる括れと思われ、玄室長は2.20mを測る。また、断面形は全般にドーム状で奥壁に近づくにつれ半円形を呈し、天井部と側壁との区別は不明瞭であるが、羨道部に近づくにつれ台形を意識させ、緩いながらもコーナーの造出がうかがわれる。床面は平坦に仕上げられており、奥壁から玄室開口部に向かって緩やかに傾斜し、その傾斜角は平均して約6.0°である。なお、中央部の高さ1.23m、奥壁部の床面幅1.46m、中央部の床面幅1.60mを測る。

羨道部は南に向かい徐々に幅を増すが、その形状は築造時と大きく変化しているものであろう。しかし、開口部から羨道部にかけて段差が設けられていることは十分に確認される。現況で60cm程度、左側壁の一部（断面Fライン付近）に遺存する床面をもとにすると約30cmの落差を測る。段差はこの一段のみで、玄室奥壁から水平距離にして6.84mを測る地点で自然の急斜面に続く。

掘削時の鑿状工具痕は天井部に確認される。風化によってその形状に差異が生じており、計測値に誤差があると思われるが、最も残りの良好な部位で幅5.0cmを測る。

(2) 2号横穴墓（第4・5図、図版4・5・6・7）

玄室と羨道部の境付近で開口している。築造時における玄室天井部の多くが剥落し、凝灰岩で形成された岩盤が剥き出しになっている。樹木伐採の後に表土除去を行い、玄室内で10cm程度、羨道部入口付近で40cm程度の堆積土の深さを測る。古くから開口していたため特に奥壁部左側の剥離が激しく、床面にも後世の浅い掘り込みや焚き火の痕跡がみられる。また、1号横穴墓と同様に山頂部から流下する雨水が羨道部の床面中央部を削り、長い自然流路状の凹みを呈している。このような崩落ないし流失した箇所がみられるものの、岡本山横穴墓8基の中で比較すると形状における保存状態は良好な部類に属する。

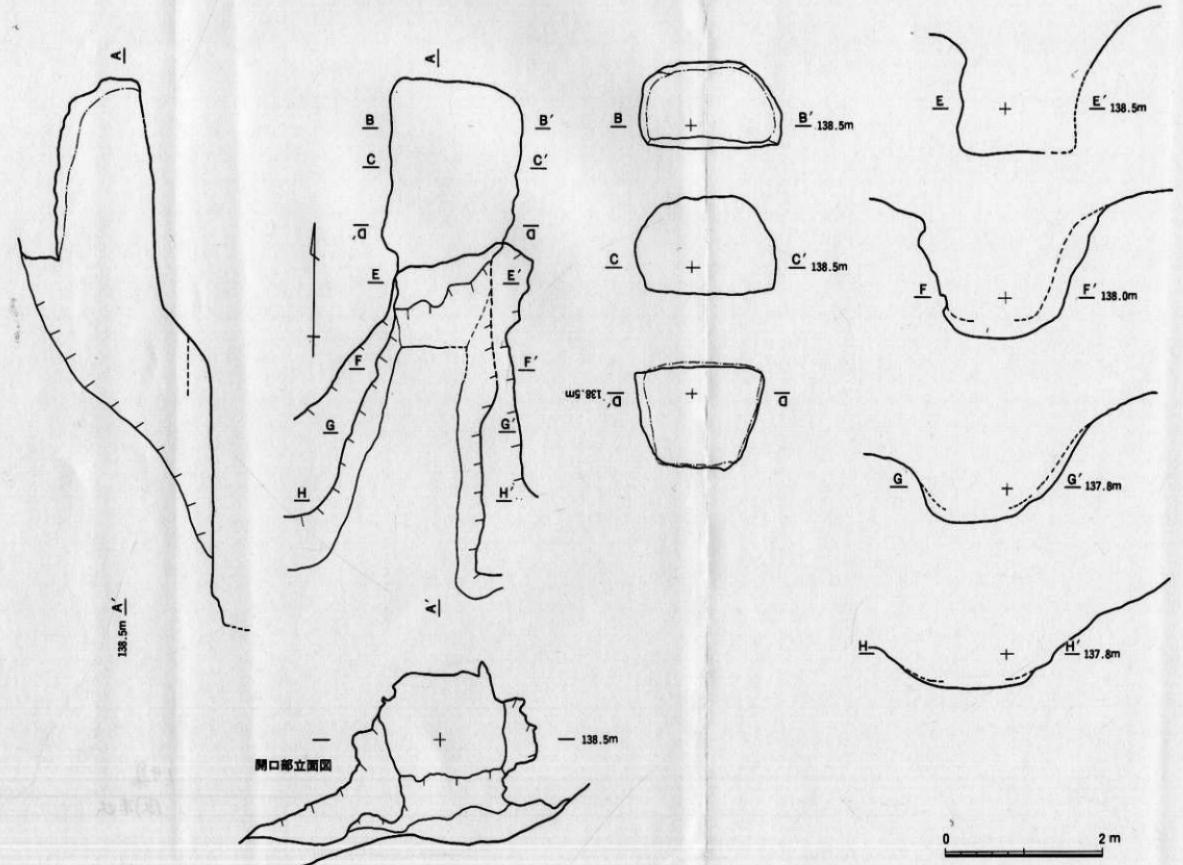
当初、玄室と羨道部の判別に際して床面の段差（断面Fライン付近）をその境界と考えていたが、両側壁に付着する草木の根を取り除き清掃した結果、玄室両側壁に対応する掘り込みを確認し、この変換点を玄門部と位置づけた（第4図参照）。側壁から羨道部へは一見するとその幅を徐々に狭めながら連続しているようにみられるが、床面中央部から約50cm上（標高139.23m）で平面図化を行うと側壁への掘り込みの存在を読み取ることができる。比較的保存状態の良い左側で高さ109cm、最大幅45cm、奥行き約20cmを測る。

玄室の平面形は長方形を呈し、玄室全長3.12m、奥壁部の床面幅3.54m、中央部の床面幅3.44mを測る。主軸方位はN-20°56'-Eで、南南西に開口する。断面形は台形で、各面とも平坦に仕上げられており、両側壁・天井部との区別はつきやすい。中央部の高さは2.04mを測り、岡本山横穴墓の中で最も規模の大きなものである。これは久々利川水系の横穴墓の中でも大型に属するものであろう。天井は玄門部に向かって傾斜しその高さを減していく。残存した天井部は工具痕を比較的よく残しており、痕跡は縦長に走り、隅は直角に近い。断面は平坦で幅は4.0cmを測る。この形状から刺突はおそらく先端が平刃状の工具を使用したと考えられる。工具痕は天頂部で左・右各コーナーに向かって放射状に、壁に近い部位はその側壁に対して垂直方向に打たれている。刺突痕には4.5~4.8cmの範囲で計測されるものもあるが、風化によって拡大したと思われ、確認された中では同一の工具を使用したと考えられる。

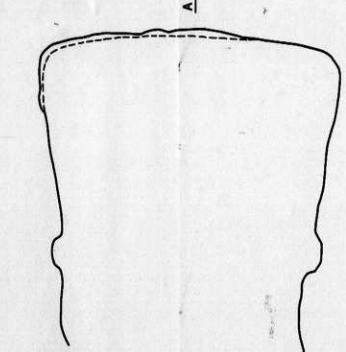
床面は奥壁部付近に残る。玄門部に向かって傾斜し、角度は5.5°で天井部より緩い。床面には後世の掘り込みと思われる浅い窪みがあるものの遺構と認めるものはなく、特別な埋葬施設は残っていない。

羨道部は玄門部から幅を若干狭めながら連続するものの、断面IラインからJラインにかけて急激に内湾する。この付近を羨門部と考える。その幅は1.10m程で、全長4.16m、最大幅は3.2mである。床面は流水によって失われ断面形は不明である。しかし玄門部の段差に続き、羨門部にも段差が設けられており、ここでは2段確認されることが特徴である。羨門部から先は幅3m程の緩斜面が続き、玄室奥壁から水平距離にして11.2mを測る地点で自然の急傾斜に連続する。

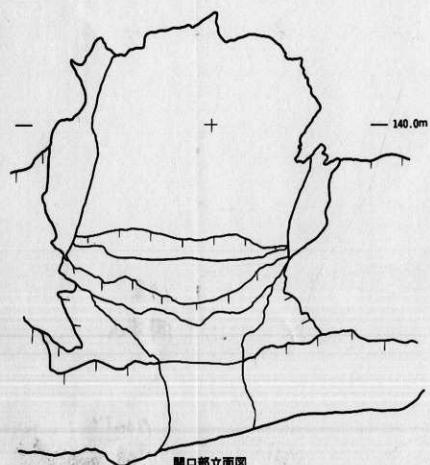
遺物の出土については、1号横穴墓と同じく細心の注意を払ったが皆無であった。



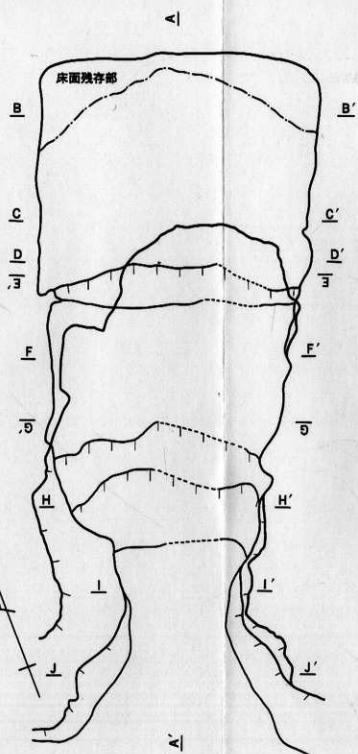
第3図 1号横穴墓実測図



玄室外部縦図
(床面より50cm上方で計る)

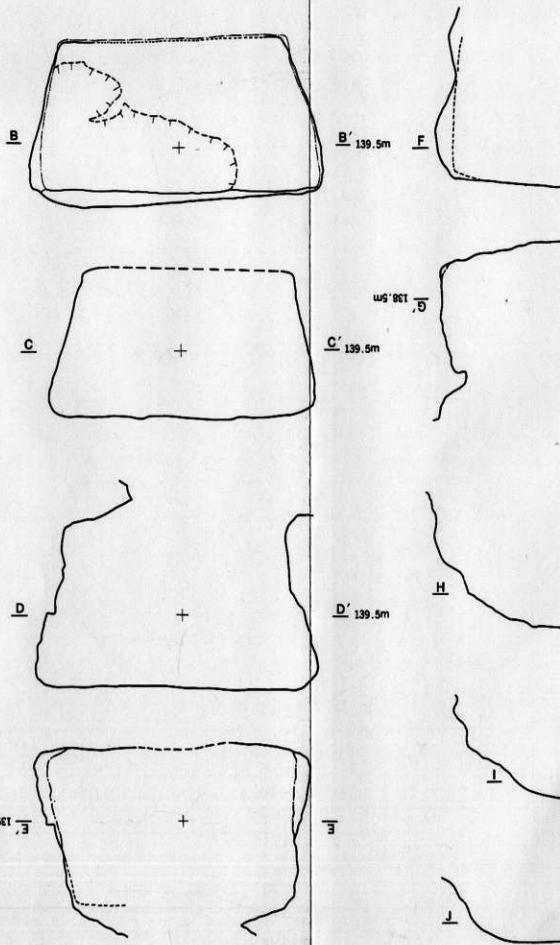


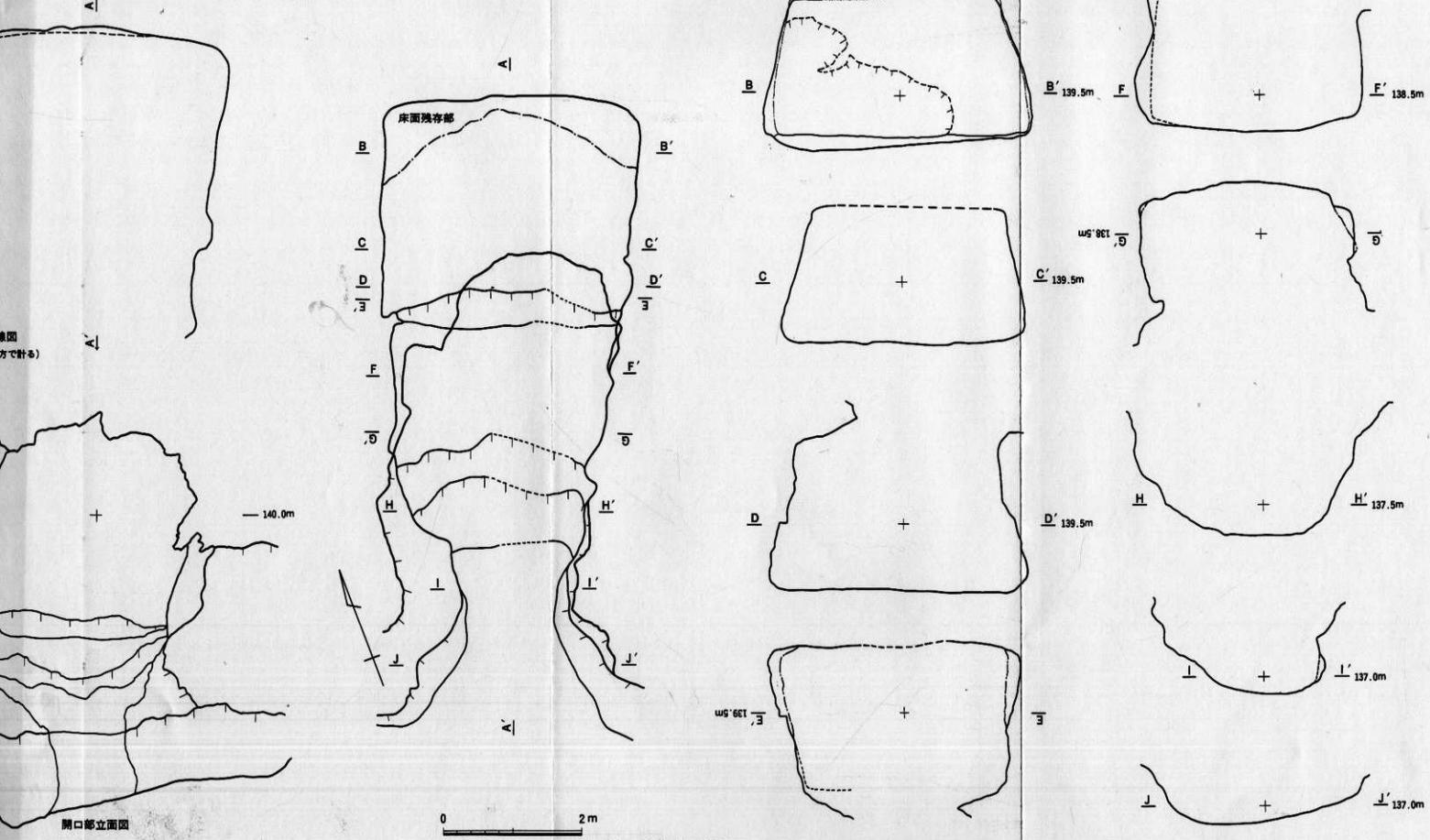
開口部立面図



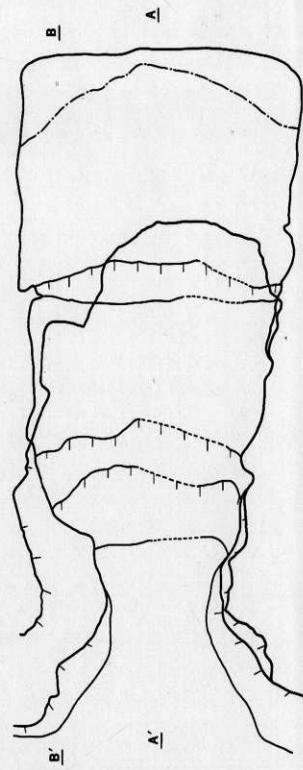
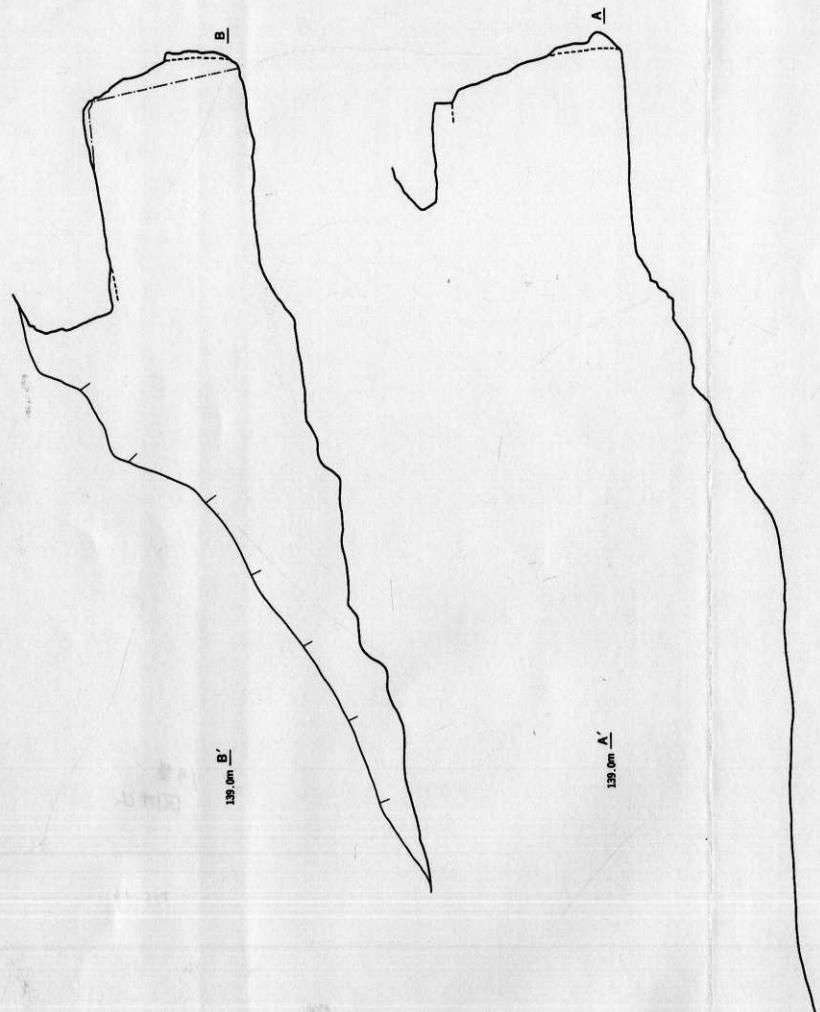
0 2m

第4図 2号横穴墓実測図①





第4図 2号横穴墓実測図①



0 2 m

第5図 2号機穴蓋突洞圖②

第4章 まとめ

今回の調査で注目されることの一つは、2号横穴墓の玄門部に相当する両側壁の柱状加工である。当初、側壁の崩落した一部であると見ていたが、精査の後、再び観察すると、その掘り込みの形状に意図された形（長方形）があること、玄室から羨道部へ移行する位置にあり、なおかつ、対になることを指摘することができ、玄門構造に関連すると判断したものである。柱状加工の有無に視点を持ち、つぶさに3号から8号横穴墓を観察したが、この2号横穴墓に限定されるに至った。この玄門構造は久々利川水系の過去の調査例の中では見当らないものである。規模と形状は第3章・第2節に記したため繰り返さないが、この加工は何を示すものであろうか。一つの可能性として玄門部と羨道部の境界を意識させるものと考えたい。この横穴墓は明瞭な床面段差を持ち、両袖部を持っている。この両袖部を強調するかのような受けとめは無理があろうが、袖部の一コーナーに玄室の場と羨道の場を明確に区分する施設の存在を見い出したい。さらに、これが掘り込みだけで区分されたか否かは、他の類例を示すか、掘り込み部に特異性を与える遺物、または閉塞状の遺存物が確認されないかぎり、証明することは困難であり、横穴完成後の初葬に伴うものか、追葬時に改めて造られたものかを判断することも現状では不明な点が多い。いずれにせよ、岡本山8基の中で例外というよりも、特徴として捉えることができ、平面形における2号横穴墓の明瞭さと規模の大きさとともに注目されるところである。

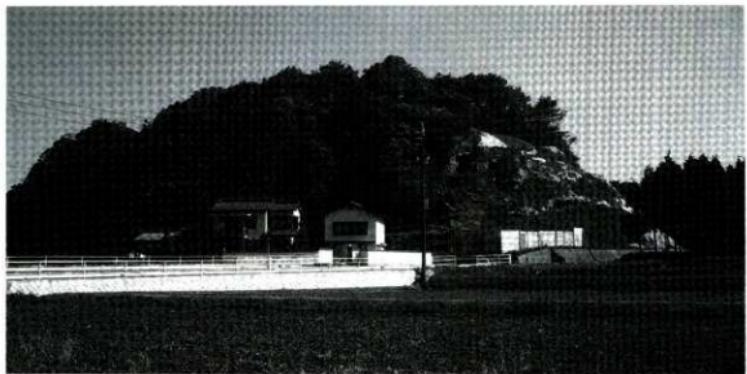
次に、岡本山横穴墓全般の平面形と構造を検討する。まず、玄門部と羨道部に段を有することは共通しているが、羨門床面にさらに段があることを考えたい。2・3号横穴墓は玄門部を入れて2段になっている。この段は地形的なもの、つまり、玄室奥壁から自然の急傾斜に至る箇所まで距離があることに第1の要因があろう。排水を考慮して造られたと同時に、羨道と前庭部・墓道を区別することが意識されたと思われる。正面に立ち奥壁を見ると高壇状に造られたことが分かり、築造時に外観を強く意識していたことを伺わせる。次に、玄室の形態は、両袖型であることが共通点として認められる。平面形は、1号横穴墓（縱長長方形）、2・3・4・5・7・8号横穴墓（横長長方形）、6号横穴墓（不整円形）の3種に概ね分かれ、横長長方形が多い傾向が見られる。平面形よりも、玄室面積にこそ問題があると思われるが、実際の調査が1・2号横穴墓に限られたため不明である。なお、1・6号横穴墓の共通点は小規模ということと、築造に困難な急斜面に穿たれていることである。そして、天井高を見ると2・3号横穴墓が際立って高いことが分かる。

以上、横穴墓の形態は一見ばらばらであるが、2・3号横穴墓に形状の明瞭さ、丁寧さを指摘できる。年代決定の指標となる遺物による推定が不可能な中で検討を重ねることは遅延され、明瞭～不明瞭という図式は危険性を伴い、階層差での検討を必要とするが、選地の条件を含めこの2つの横穴墓が古墳時代後期の中で先行していた時期に築造されたと考える。久々利川水系全体、または、各地区各支群単位で論ずることや、被葬者集団との関連は今回できなかったが、今後、他の可能性と根拠を明らかにして多角的に検討していきたいと考えている。

参 考 文 献

- 可児町 1980 『可児町史（通史編）』
- 可児町教育委員会 1977 『平牧の地層と化石』
- 可児市教育委員会 1976 『神崎山古墳発掘調査報告書』
- 可児市教育委員会 1985 『羽崎古墳群』
- 可児市教育委員会 1994 『川合遺跡群』
- 可児市教育委員会 1994 『久々利西山横穴墓』
- 可児市教育委員会 1988 『可児川下流域の地質及び植生』
- 長瀬 治義 1990 『可児地域の古墳文化メモ』『岐阜県文化財保護協会会報』
- 池上 悟 1980 『横穴墓』 ニューサイエンス社
- 赤崎 敏男 1993 『横穴』『考古学調査研究ハンドブックス1』雄山閣出版
- 静岡県教育委員会 1983 『遠江の横穴群』（静岡県内横穴群分布調査報告書）
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1992 『平尾野添横穴群』
- 花田 勝広 1990 『河内の横穴墓—高井田横穴群の基礎的調査—』『考古学論集3』
- 柏原市教育委員会 1991 『高井田横穴群III』
- 柏原市教育委員会 1990 『高井田横穴群IV』
- 経済企画庁 1974 『土地分類基本調査』 美濃加茂

図 版



調査前全景



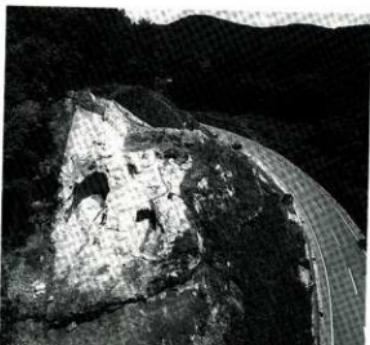
1号横穴墓 調査前



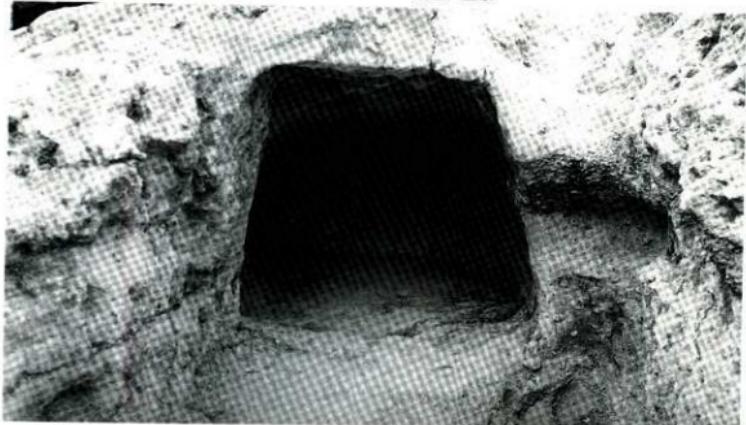
2号横穴墓 調査前



久々利川より岡本山をぞむ



調査区全景



1号横穴墓 正面



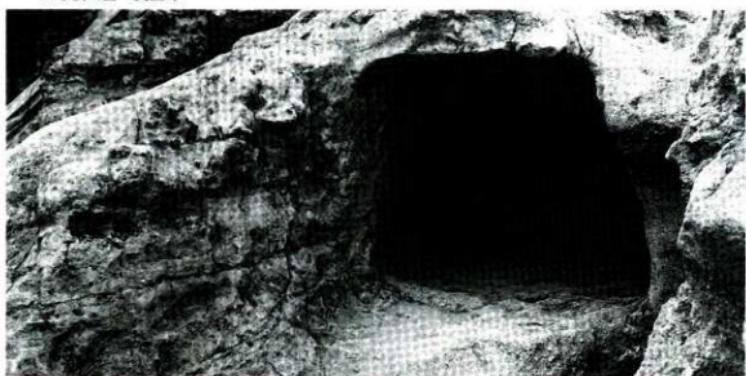
1号横穴墓 右側壁部



1号横穴墓 玄室左側壁部



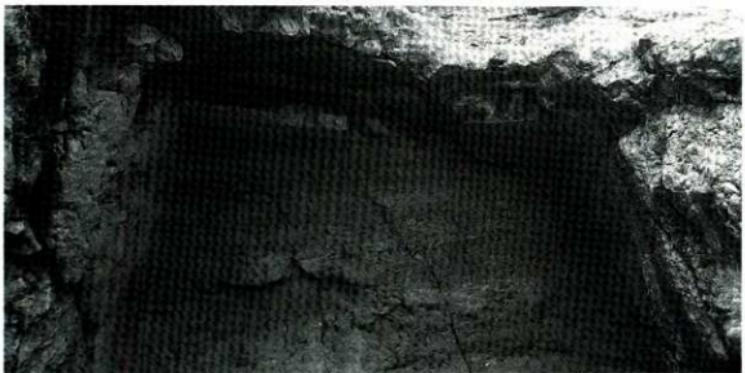
1号横穴墓 奥壁部



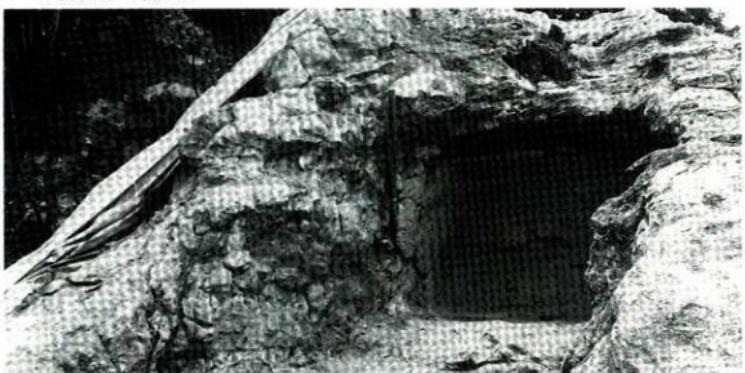
1号横穴墓 右前方より



1号横穴墓 床面～左・右侧壁部



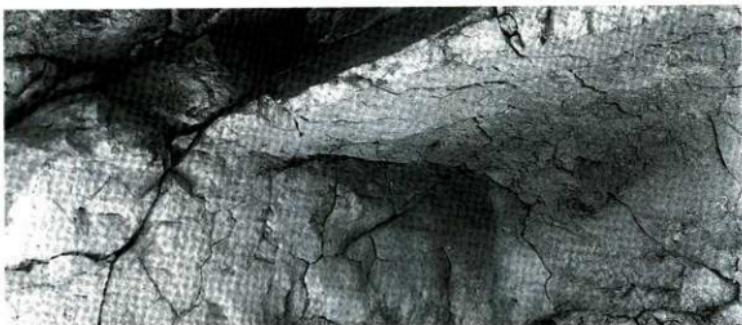
2号横穴墓 玄室正面



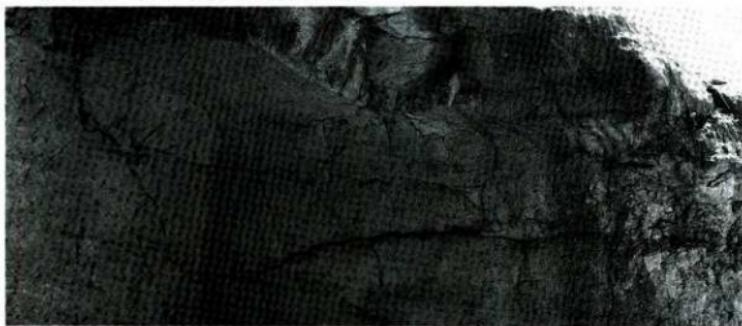
2号横穴墓 右前方より



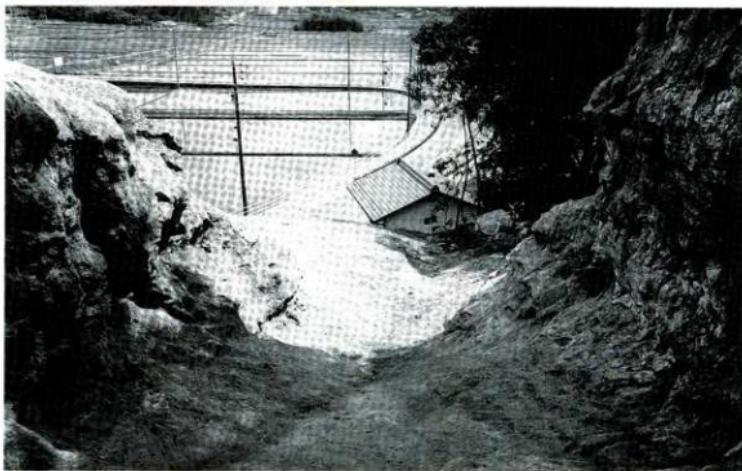
2号横穴墓 左前方より



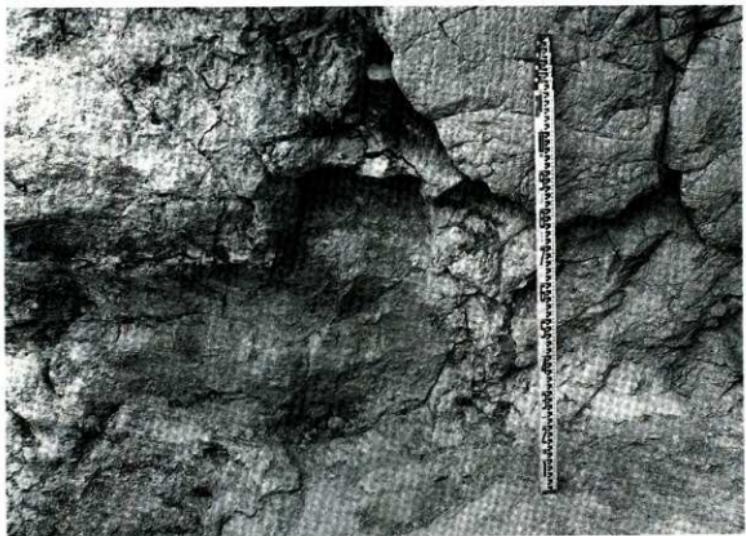
2号横穴墓 玄室左 天井部～側壁・奥壁部



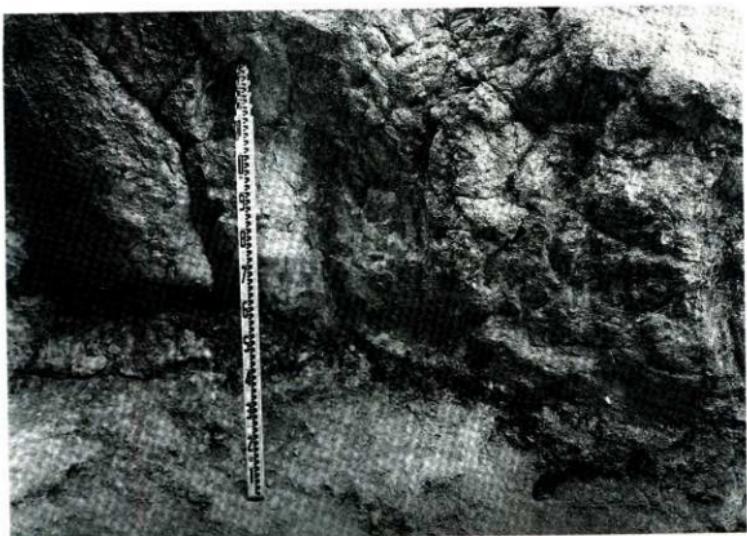
2号横穴墓 玄室右 天井部～側壁・奥壁部



2号横穴墓 床面～左・右側壁部



2号横穴墓 左玄門部



2号横穴墓 右玄門部



2号横穴墓 左天井部工具痕



2号横穴墓 右天井部工具痕



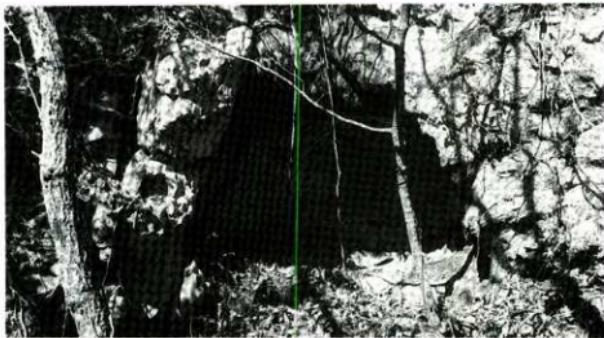
岡本山 3号横穴墓 現況



岡本山 4号横穴墓 現況



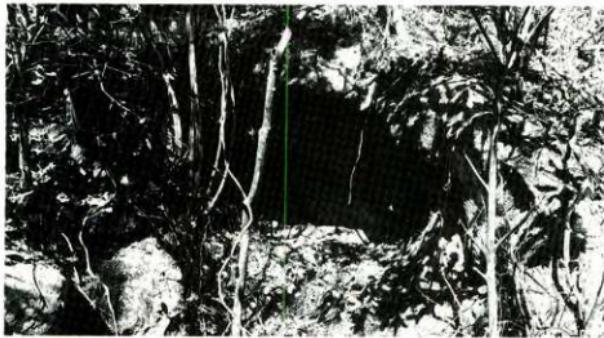
岡本山 5号横穴墓 現況



岡本山 6号横穴墓 現況



岡本山 7号横穴墓 現況



岡本山 8号横穴墓 現況

報告書抄録

ふりがな	おかもとやまおうけつば						
書名	岡本山横穴墓						
副書名	主要地方道多治見・白川線県単現道構造改築工事に伴う緊急発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書						
シリーズ番	第19集						
編著者名	各務光洋 市原輝明						
編集機関	財團法人岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒500 岐阜県岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内) TEL 058-264-1111 (814)						
発行年月日	西暦1995年3月31日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査原因
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
おかもとやまおうけつば 岡本山横穴墓	岐阜県可児市久々 利柿下入会岡本	21214	G34K04866 G34K07563	35° 24'	137° 6' 24"	19940509~ 19940613	主要地方道 多治見・白 川線県単現 道構造改築 工事に伴う
	5-1					200m ²	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
岡本山横穴墓	横穴墓	古墳	横穴墓	2基			

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第19集

岡本山横穴墓

主要地方道多治見・白川線県単現道構造改築工事に伴
う緊急発掘調査報告書

1995年3月25日 印刷

1995年3月31日 刊行

編集・発行 財團法人 岐阜県文化財保護センター
岐阜市司町1 (岐阜総合庁舎内)

印 刷 西 濃 印 刷 株 式 会 社